

新の国 企業探訪

株式会社 エイブルフソー

株式会社エイブルフソーは、民間企業の工場や浄水場、下水処理場など公共施設の現場で使われる各種機械、電気設備の設置工事をはじめ、修繕、メンテナンスまで産業社会を支える総合設備事業者として成長を続けてきた。2007年には事業承継によりコンベアメーカーとして製造業への市場参入を果たした。設備工事とモノづくりの両輪で社会に広く貢献する企業として存在感を高めようとしている。

自宅庭先に 4 畳半サイズのスペースで起業

株式会社エイブルフソーは 1990 年、前社長で創業者の西川小三郎氏が 50 歳を機に、公共事業の電気工事、機械器具設置等を請負う会社、「株式会社エイブル」として立ち上げた。西川氏は起業以前、上下水道の維持管理会社に勤めていた。埼玉県内のエリア長を任されるなど管理職として働いていたが、自分には現場の方が肌に合っていると独立を決意した。創業は自宅庭先のカーポートを潰し、そこに小さなプレハブ小屋を建て“新本社”にした。スチール机 3 台とコピー機を入れたら、狭くて歩けない 4 畳半ほどの空間であった。

横文字で付けられた“エイブル”という社名。一見、何をしている会社なのか想像できないが、社名



自宅のカーポートを壊して「本社」となるプレハブ小屋を建築

には仕事に対する西川氏の想いが込められていた。創業者の息子で二代目を引き継いだ西川英寿社長は「英語の助動詞、can の be 動詞形が be able to になり、そこから取りました。父は社名から業種に束縛されるのを嫌い、様々なことにチャレンジしたいという気持ちから名前を付けた」と話す。その後 2014 年、後の事業経緯から社名を「株式会社エイブルフソー」に変更していく。

電気工事業としてスタート

エイブルは当初、電気工事業を手始めにスタートしたが、その経緯が面白い。西川氏がサラリーマン時代に脱サラ後の事業プランを部下に話したことがある。すると話を聞いていた複数の部下が「私にも手伝わせてください」と予想外に申し出た。“本当に手伝ってくれるのだろうか？”西川小三郎氏は当初、疑心暗鬼であったが、蓋を開いてみると何と 13 人もの部下が退職しエイブルに“転職”することとなった。その中に電気のスベシャリストがいた。信頼のおける人物で、西川氏は、“まずは電気を中心にやっつけよう”と決め、電気工事の会社としてスタートを切った。

また、独立の話聞いた以前の取引先には、“うちの仕事を手伝わないか”と応援してくれる経営者も現れた。「創業時は決して順風満帆ではなかった

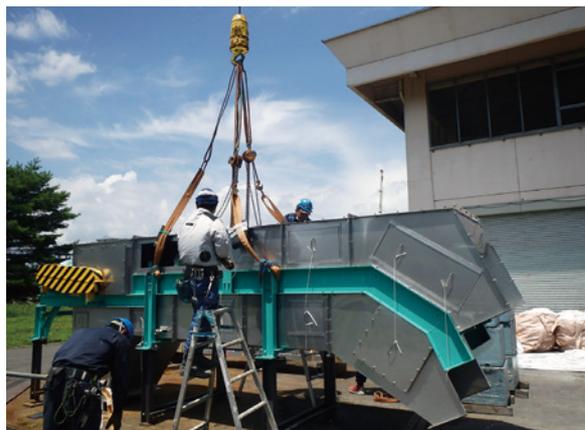
が、周囲に助けられて船出ができた」(西川社長)と当時を振り返る。

一般的に電気工事と言えば、建築に付帯して配線を行う工事が大きなシェアを占めている。民家ならば、建物や照明を扱う屋内配線の工事が中心で、工場では、機械を駆動させる工事が中心になる。現在のエイブルフソーは、工場の生産設備に携わる電気工事を主に展開している。その範囲は広く、地元埼玉県を中心に関東一円に及んでいる。

父親を説得して機械分野へ進出する

実は西川社長は自身も大学在学中から起業を考えていたという。まだ父親が起業する以前の話で、まずは社会経験が必要であろうと、大学卒業後、一度は会社勤めを選んだ。進んだのは内装業界。店舗のプロデュースやディレクションに関心を持ち、そこで経験を積もうと考えた。例えば、資金は持っているが事業化に悩んでいる人と、資金はないけれど技術やノウハウは持っている人がいたとする。西川社長は、その両者を結び付ける橋渡しの仕事に憧れた。仕事を通じて社会経験を積みベンチャーを興そうという算段で準備を進めていた。ところがその後、起業した父親から“仕事を手伝ってくれないか”と突然誘われた。西川社長は父親が起業すると聞いた時は正直、驚いたが、「同じ苦勞をするなら父を応援したいという気持ちに変わった」と心境の変化を話す。

そして西川社長はエイブルに入社する。文系出身ではあったが、必死に勉強して電気工事に必要な資格を1つ残らず取得した。ひと通り技術をマスターしたある時、機械プラントメーカーの大手企業から電気技術者の派遣要請を受け、父である社長から派遣を命じられた。それがエイブルでの初仕事であったが、西川社長は無事に仕事をまとめあげた。出向中には仕事の傍ら、機械の勉強をする機会も得て、浄水場で使われる機械の修理や交換の仕事を任されるようになった。当然のことだが、電気と機械では専門技術が異なりビジネス分野も分かれている。そのため両方の技術に精通して工事ができる会社は意外に少ない。西川社長は出向中に身をもってその実態を知ることとなった。



ベルトコンベアの設置風景

出向から戻った西川社長は、父親に「機械の仕事をやらせて欲しい」と直談判した。しかし父親は“そんなのできるのか”と、すぐに首を縦には振らなかった。作業に必要な道具もないし、人もいない。ましてや知識もない。ないものづくしではあったが、西川社長は、電気と機械両方ができる会社を目指したいと訴え、結局、エイブルの中で一人、機械の仕事をやらせてもらうようになった。するとやがて追い風が吹き始めた。“西川に頼めば、電気も機械も両方いっぺんにできるから便利だ”。仕事は嘘の様にどんどんと増え始めた。

機械ビジネスを通じたコンベアメーカーとの出会い

電気工事から機械修理へとビジネスのウイングを広げたエイブルにさらなるビジネスチャンスが到来する。機械修理の仕事の付き合いで、ある時、大阪に本社を置く「西部扶桑機工」というベルトコンベアメーカーと知り合った。創業社長が40年以上かけて一代で築き上げた会社で、ベルトコンベアの設計から製造まで一貫して取り組んでいた。西部扶桑のコンベア製品は上下水道処理場で使われていた。

下水処理場では、様々な生活排水や排水溝で流れ



ベルトコンベアの修繕風景

た下水を濾過して汚れを取っている。その時に発生する汚泥を次の処理をする工程まで運ぶが、西部扶桑の製品はその搬送機器として広く使われていた。コンベアのサイズは長尺製品では 100 メートルに及ぶ巨大な設備である。社会を支える立派な企業であったが、西部扶桑の創業社長は知り合った当時、既に 90 歳を超えて後継者不在で廃業を決めたという。

廃業にあたり、社長は右腕の埼玉支店長を呼んで「コンベア的设计図を委ねるから、何かに使って仕事をしたらいい」と図面一式を譲り渡した。西川社長はその支店長と懇意にしていた。支店長から話を聞いた西川社長は“せつかくここまでやってきたのにもったいないな”と思った。エイブルは西部扶桑機工が納品したベルトコンベアの機械や電気 of 修理を任されていた。

同社の製品は全国の下水处理場のインフラ設備として使われていたが、「廃業したら一体、誰がメンテナンスをするのですか？」と支店長と次第に込み入った話になり、西川社長は「ベルトコンベアのこと何も分からないのですが、教えて貰えば一生懸命やります。電気も分かるし、機械も多少は勉強しているので、多少の工具も用意はできています。現場

で教えてくればやりますよ」と熱心に語り、結果的に全ての図面を持参してその支店長さんに当社に来ていただいたという。仕事を通じた出会いが縁につながり、エイブルは製造業として新たな道を歩み始めた。

コンベアメーカーとして事業を拡張

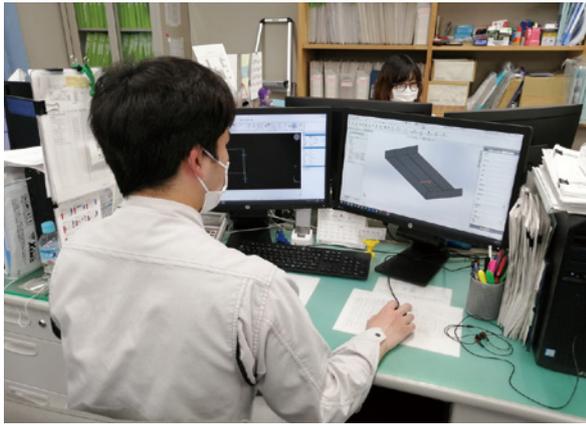
2014 年、エイブルは新事業開始にあたり、社名を「株式会社エイブルフソー」に変更した。コンベアメーカー「西部扶桑機工」の名前を譲り受けた形だ。西川社長は「西部扶桑を忘れてはいけない。その思いから社名をエイブルフソーへと変更した。これからもお客さまに愛されるベルトコンベアを作っていきたい。創業の電気工事も含めて、社会のインフラを支えていきたい」と決意を回顧する。

実は西川社長は、当初、西部扶桑機工の資産は受け継ぐが、コンベアの開発、生産は念頭になかった。理由は生産工場を持っていなかったからだ。生産設備の不要なベルトコンベアの修理やメンテナンスに特化して事業承継をイメージしていたが、事業承継時に橋渡し役の支店長以外に設計技術者や生産現場の担当者など 5 人がエイブルフソーに移籍した。そして偶然であったが、行田市内の工業団地に適切なサイズの工場物件が売りに出されていた。西川社長は新製品のコンベア的设计、開発ができる体制ができたことで、工場を居抜きで購入した。エイブルフソーのこの取組みは、後に後継者難の企業から事業継承し、主力事業へと育て上げた実績が埼玉県から認められ 2017 年「彩の国 経営革新モデル企業」に選定された。

民間市場へベルトコンベアの販売に参入する

現在、エイブルフソーの事業は電気工事業、機械器具設置工事業、コンベアのメーカーの 3 本柱で構成されている。売上構成比は電気工事 (20%)、機械器具設置工事 (15%)、残り 65% がベルトコンベア事業となっている。ベルトコンベア事業は、製品の設計から製造まで持田工場 (行田市) で一貫して行い、既存製品の修理、メンテナンスも手掛けている。

同事業について、従来は取引先の 100% が官公庁



CADを使ったベルトコンベア的设计風景



西部扶桑機工から引継いだベルトコンベア的设计図面

であったが、今年度から小型コンベアの開発に着手して民間企業への販売も開始する。「公共事業向けベルトコンベアメーカーとして業界トップを目指していくと同時に、民間市場にも参入して、我々のコンベア技術が活躍できる場を広く開拓していく。大企業にとって隙間ビジネスでも、われわれにしてみたら大きな隙間で、そこが生き抜く活路にはなる。だから、隙間産業に商機がある」と西川社長は今後の事業の抱負を語る。

社会に必要な存在として事業を継続していく

1990年、エイブルフソーは自宅の車庫を改造して小さく誕生した。起業当時は社長を含めて十数名であった会社は着実に成長を続けてきた。現在の社員数は36名。うち35名が正社員で、その多くが技術者で占められている。西川社長は20年前に行田市内に新本社を建築、自身は本社2階に住んでいる。事業内容にも即しているが、祖業の電気工事

業もベルトコンベア製造事業も社会インフラを陰で支えている存在だ。大風呂敷を広げるのではなく堅実経営を心掛けてきた。同社が取扱う製品は20年、30年と長く現場で使われ続ける。その間に部品も壊れ修理が必要になり、メンテナンスは欠かすことができない。事業の今後の目標について西川社長は「売上を10倍に伸ばすなどの目標はない」と言い切る。その上で、「代わりに必要とされ続けることが重要。エイブルフソーに頼めば必ず直してくれる。求めて貰える会社であり続けることが重要と思っている」(同)と続ける。

但し、必要とされるニーズや技術は時代と共に変化を続けていく。それを踏まえて西川社長は「社会で今、必要とされているものは何か、常にアンテナを高く上げてキャッチすることが大事。聞く耳をキチンと持ち、それを判断、決断する力が今後求められていく」と話す。今後の同社事業の発展が注目されるどころだ。

企業概要

株式会社 エイブルフソー

<http://ablefuso.co.jp/>

- 代表取締役社長：西川英寿
- 設立：1990年8月
- 事業内容：コンベヤ設計・納入事業、
機械設備・電気設備工事業業、
メンテナンス事業
- 本社：行田市城西 5-10-23
- 電話：048-553-6265
- 持田工場：行田市持田 1-5-2



西川社長



持田工場